

291 モヤモヤ病における ^{133}Xe 吸入法による脳血流動態の評価—X線CT, 脳血管撮影, PETの所見との対比を含めて—

土屋一洋, 町田 徹, 西川潤一,
町田喜久雄, 飯尾正宏(東大 放)
飯尾正明(国療中野 放)

モヤモヤ病患者におけるX線CTならびに脳血管撮影の所見と ^{133}Xe 吸入法により得られた局所脳血流量の所見の対比検討を行った。あわせて $^{11}\text{C}\text{O}_2$ によるポジトロンCT施行例にはその所見との対比も行った。

また臨床症状の変化に伴い経時的に ^{133}Xe 吸入法で局所脳血流量測定を反復した症例およびencephalomyosynangiosisを施行され術後に本法で手術効果の追跡を行った症例に関しても検討を加えた。

小児例の多い本疾患における脳血流動態の把握に比較的確率少なく行える本法は有用であると考えられる。

292 内頸動脈閉塞症に対する脳RIアンジオグラフィとX線CTスキヤンの比較

関 宏恭, 前田敏男, 松田博史, 石田博子,
利波紀久, 久田欣一(金大 核)

脳RIアンジオグラフィとX線CTスキヤンが施行され、脳血管撮影で内頸動脈狭窄あるいは閉塞の確認された26例について検討した。

内頸動脈の完全閉塞を有した10例は、脳RIアンジオグラムで全例が内頸動脈の描画不良を示した。一方X線CTスキヤンでは半数が病側半球部に梗塞巣を示した。脳血管撮影で内頸動脈の狭窄(70%以下の狭窄であつた)を示した例の脳RIアンジオグラフィの検出率は26%であり、X線CTスキヤン上での梗塞出現率は56%であつた。以上のことから脳RIアンジオグラフィは内頸動脈狭窄症の検出には問題を残しているが、内頸動脈の完全閉塞例の検出には優れた検査法であることを確認した。

293 閉塞性脳血管障害におけるRI AngiographyとCT scan

島村 修, 石津徹幸, 落合正和(京都洛東病院)
足立晴彦, 伊地知浜夫(京府医大, 2内)

閉塞性脳血管障害患者にRI Angiography in vertex view(RAGV)を行い、左右大脳半球に対称性に定めた4対の関心領域について、RAGVより得たTime activity curve上で、Appearance to Peak time, Peak count, Mode of transit time(Oldendorf), Upward slopeの4つのParameterの差を左右で比較し、CT scanにおける所見や臨床所見を合せて検討した。

脳血管写にて閉塞所見の明らかであった症例については、前々回の本学会で報告したごとく、大脳半球左右間の灌流の差を明らかにし得たが、今回の検討では、脳血管写にて所見の乏しい症例でCT scan上異常の明らかなものについても、RAGVより得たParameterの間に差が認められた。脳血管写所見に乏しく、CT scan所見の明らかなものには、RAGVの各Parameterのうち、特にUpward slope比に著明な差がみられるものと、差が不明瞭なものとの二群にわけられたが、前群は臨床、おおむね、所見に見合った著明な神経脱落症状を呈し、後群は機能の脱落が軽微なものが多かった。以上より、脳血管写やCT scan等の形態的検査に加えてRAGVを検討することは臨床上有用であると考えた。

294 脳槽シンチグラフィによる脳室-腹腔短絡(V-Pシヤント)の機能評価

石田博子, 前田敏男, 松田博史, 関 宏恭,
久田欣一(金沢大 核)

V-Pシヤント術後の患者28例に腰椎穿刺による脳槽シンチグラフィを施行し、頭部カウンターの推移によつてシヤント機能を評価した。脳室描画は28例中21例に認められたが、その中で総合的にシヤント機能良好と判定された13例の24時間と5時間の頭部カウント比($^{24}\text{C}/^{24}\text{C}_5$)は $0.228 \sim 0.715 (0.433 \pm 0.138)$ であつた。これに対し、シヤント機能不良と判定された4例の $^{24}\text{C}/^{24}\text{C}_5$ は $0.910 \sim 1.683 (1.251 \pm 0.299)$ と高値を示した。残る4例は臨床的にV-Pシヤントの効果が全く認められなかつたもので、その $^{24}\text{C}/^{24}\text{C}_5$ は $0.675 \sim 1.836$ と高値でありシヤントが十分作動していなかつたと推測されるが、確認はできなかつた。一方、脳室描画の見られなかつた7例中シヤント機能が良好であつた2例の $^{24}\text{C}/^{24}\text{C}_5$ は $0.452, 0.605$ であり、シヤント不全が疑われた7例では $0.500 \sim 4.65 (1.726 \pm 1.504)$ であつた。以上の結果より、脳室描画陽性例においては $^{24}\text{C}/^{24}\text{C}_5$ はシヤント機能をよく反映、目安として0.7以下であれば機能は良好と考えてよいと思われる。また、脳室描画陰性例においても $^{24}\text{C}/^{24}\text{C}_5$ によつてシヤント機能ある程度評価できる可能性がある。